# 海から来た大王
## 百舌鳥・古市古墳群の謎を解く

清水守民

「百舌鳥・古市古墳群」の世界遺産登録、おめでとうございます。

五世紀の河内地方に突如として築かれた中期型巨大前方後円墳群、堺の人は百舌鳥巨大古墳の被葬者のことを「**御陵さんは海から来た**」と言っているそうです。

記紀ではこの巨大古墳をして「古くから関西地方に依拠し列島を支配し続けた王者『天皇』の墓」と位置付けていますが、それと「海から来た大王」ではちょっと違和感があります。

とにかくこの「5世紀の巨大古墳の大ブレイク」はまだ謎だらけです。これをじっくりと解いてみましょう。

### ■百舌鳥・古市古墳群のランドプラン

お話は先ず、この地域での築造状況にはある「不思議なルール」があることから始めましょう。

**図1**をご覧ください。5世紀の河内地方巨大古墳は寺山-日置を結ぶ東西線以北にすべて築かれています。さてこの図は『あしたづ』前号で紹介しました「大和盆地の十環五芒星結界構造」（図右）に対して、その西側「河内地方」に同サイズの結界円を接合したもの、これが「河内の古代」を見事に描出するようです。

**図2**がその北半円で、古代直道が結界ラインに従って造られ、百舌鳥・古市古墳群はその東西の五芒星結界に沿って営まれていることがわかります。それどころか「中世堺」の東北辺も五芒星ラインに従っています。大和の結界ルールは河内地方にも施されていました。

さて西側五芒星を観察するとそのど真ん中に伝仁徳陵が位置し、ここを中心にして百舌鳥古墳群が築かれたことがわかります。対して東側五芒星では、左袖「円環上」に伝仲姫陵や伝応神陵が築造されるという不思議な構造が見られ、ここを起点に石川西岸・古市古墳群の展開となります。で、この二大巨大古墳のうち伝仁徳陵は少雨地域の灌漑用水の役割も、伝応神陵は石川の氾濫を制する役割も果たしていそうです。

実はこの大和河内連環結界には「3世紀の箸墓」設計（**図1**）が内蔵されており、古墳時代初期からの存在がうかがわれます。そして5世紀に至り突如何らかの大集団がこの地に「流入」し、先在する五芒星結界ルールに従って巨大古墳群を営んだことが考えられます。

多分、にわかには信じがたい「仮説」でしょうが、このランドプランはそのことを強く示唆しています。

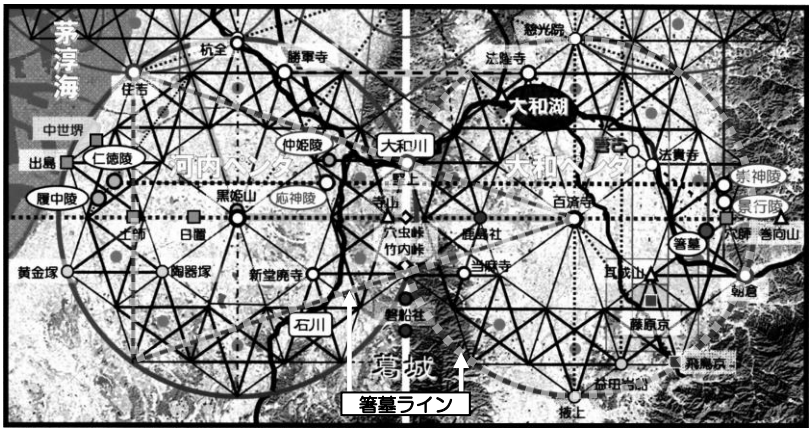
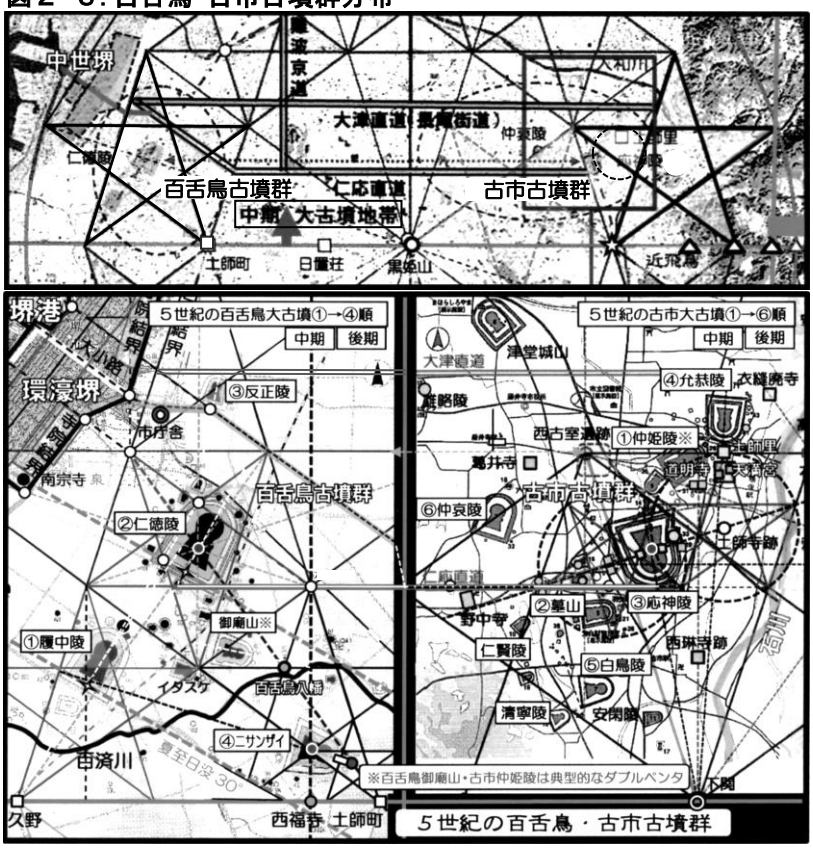



図１．大和-河内ペンタ連環結界

図２-３．百舌鳥-古市古墳群分布



## ■中期前方後円墳の築造プラン

さて「この頃に大量の流入者」とは一体何をさすのでしょうか。この時期に伝えられる記録として、「記紀」では応神天皇（神功皇后）が「遠征先の九州から反乱軍を制圧するために進攻した」、『宋書・倭国伝』では倭讃から始まる「倭の五王」の初動時期に相当します。

この「記紀」と「古墳」に絡まる事柄で、考古学者の森浩一さんが面白い指摘をしています（図４）。「中期型初頭の前方後円墳で宮崎・西都原メサホ塚のちょうど２倍が伝履中陵、仁徳天皇と妃・髪長媛の伝説から河内と日向は深い関係があるのでは」という内容です。

図５の西都原古墳群は前期古墳時代に営々と築かれた大古墳群で、メサホ塚を最後に築造が途絶えるという不思議な古墳群です。で、ここでのランドプランにも五芒星設計が入っていそうなのです。

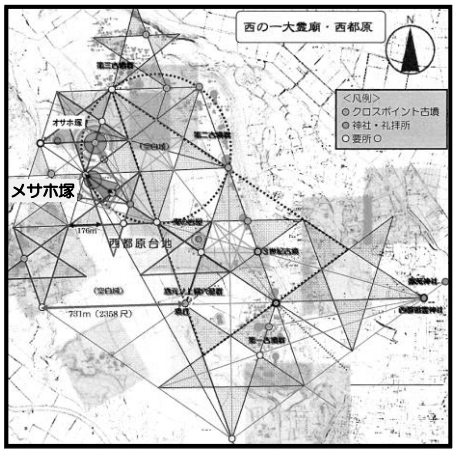
そのメサホ塚、図６のように五芒星を二つ組み合わせての「ダブルペンタ構造」が実に見事で、実は中期型前葉の前方後円墳は大小の差こそあれ、すべてがこの相似形になっています。おそらくこの「設計図共有」が中期古墳の大ブレイク現象をもたらしたのでしょう。

そして「大小の差こそあれ」と言いましたが、その「大小」にもルールがありました。図６は日向・メサホ塚と古市・伝仲姫陵を比べたものですが、その大きさが「黄金比」の関係にあり、基本となる五芒星図型をそのまま展開しての拡大築造が簡単にできます。

またこの両古墳を有する古墳群同士の関係ですが、共に「五ヶ瀬川」「石川」という大河の西岸丘陵上にあり中心部は古墳の空白地帯という構造。そこからデザインの共通する「鞍」などが発掘されており、ひょっとしたら軍馬を育てる「牧」だったのかも知れません。どうも日向と古市にも並々ならぬ関係がありそうです。

ところで古墳の築造集団ですが、「箸墓＝土師墓」と言われるほどの古代の大土木技術集団「土師氏」が周知されています。おそらく大和河内結界造りにも関わっていたことでしょう。またメサホ塚は「中期型前方後円墳の元祖」とも思われる古さであり、この完璧な設計図がこの技術者集団に舞い込んできた瞬間から大ブレイクが始まったのではないでしょうか。

その伝播ですが、どうも「九州から関西へダイレクトに入りそこから周辺に爆発」とは言えなく、図７岡山・造山古墳もメサホ塚の２倍の数値を示しています。



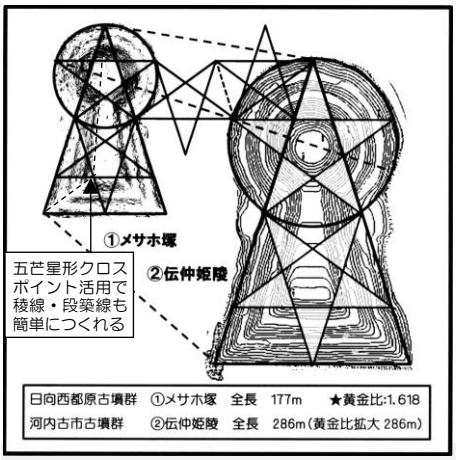




図５−６．西都原・メサホ塚と伝仲姫陵の黄金比

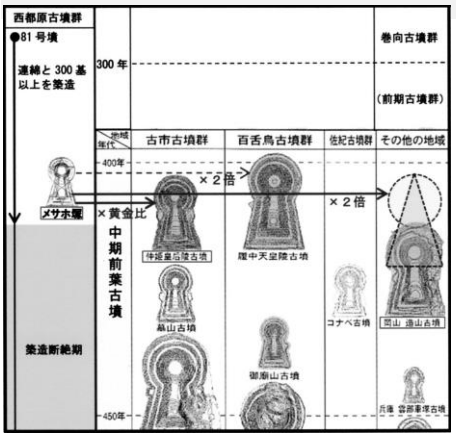



図７．中期前葉・前方後円墳のサイズ比較

図４．記紀に見る宮崎県と大阪府

## 応神（ホムタワケ）・仁徳（オオサザキ）と髪長姫　（森浩一「記紀の考古学」朝日文庫）

ホムタワケの息子のオホサザキが、髪長媛を見そめてしまった。ホムタワケは、髪長媛を息子の妻にすることを同意した。のち、髪長媛はオホサザキの妃となり、男女の子を産んでいる。子の一人の大草香皇子は、別の表記では大日下王、日下は「ひのもと」でもあり、母の故郷日向の意識との関係も注目される。髪長媛のことで考古学的に重要なのは、日向の出自ということ。宮崎県と大阪府とには、中期の前方後円墳の形に類似する場合があって、それらの年代が五世紀代ということもあり、日向から妃が出たという伝承との関連がうかんでくる。

『紀』　の異説によると、日向の諸県君牛は朝廷に仕えていたが、年老いたので日向に帰っていた。しかし、娘の髪長媛を朝廷にたてまつろうとして、播磨まで行った。ちょうどそのとき、ホムタワケは淡路島で狩りをしていた。すると数十の麋鹿が海に浮かんできて、播磨の鹿子水門に入った。使いをだして見させると、角をつけ鹿の皮をきた人間だった。「誰人ぞ」というと、諸県君牛で、娘の髪長媛をつれて来たと答えたという。

（中略）

堺市の百舌鳥古墳群の二番めの巨大前方後円墳である百舌鳥陵山（石津丘古墳ともいう。墳丘の長さ約三六〇メートル。現・履中陵）を、後円部といい、前方部といい、その形をきちんと二分の一にしたものがメサホ塚である。後円部も前方部も、その形を正確に二分の一にしているのだから、古墳時代の土木技術の高さには驚くほかない。このことは、当時すでにいく通りもの古墳の設計図があったと考えざるをえないことと、その設計図にもとづいて古墳の施工のできる技術集団（土師氏）　がいたことなどが、頭に浮かぶ。

百舌鳥陵山古墳は、オホサザキ（仁徳天皇）　の子のイザホワケ（履中天皇）　の墓に宮内庁は指定しているが、いわゆる百舌鳥三陵のうちでは、現・仁徳陵（考古学的には大山古墳）より古く、もし記紀での伝承どおりに、百舌鳥野に三陵があるのであれば、百舌鳥陵山古墳が仁徳陵ということも考えねばならない。だから、百舌鳥陵山古墳とメサホ塚を、同じ設計図で造営したことの背景には、それぞれの被葬者が、生前何らかの深い関係にあったことを示唆している。

## ■西日本ダブルペンタ古墳の軌跡と古墳文化の東遷

ここでちょっと古墳の年代を決める方法について言及しますと、出土する土器編年と共にどうも「大王墓の原型は先ず関西にあって、そこから地方の豪族に配布された」との論も導入されての判断のようで、メサホ塚などは4世紀末かとも囁かれており、築造年代は「かなりの年幅で曖昧」と考えておいた方がよさそうです。

で、ダブルペンタ古墳ですが、図8をご覧ください。メサホ塚の黄金比倍が伝仲姫陵だと紹介しましたが、そのまた黄金比倍が伝仁徳陵にあたるようで、このような巨大進化の軌跡が河内古墳群内で観察できます。

また先述したメサホ塚の2倍の吉備・造山古墳ですが（＊伝履中陵とまず同じ大きさなのに、こちらは4位であちらは3位・笑）、墳頂には出土した阿蘇凝灰岩製石棺が置いてあり、造山古墳が「九州から海を渡って来た王者」の墓であることを示しています。

「阿蘇凝灰岩製石棺」、この「石棺石の瀬戸内海東遷」も、5世紀を中心に「九州から瀬戸内・関西へ」盛んに運ばれた重要な古墳文化のひとつです。「関西の王者がある日突然阿蘇石が気に入って、大量に輸入することになった」とはちょっと考えられませんね（笑）。

２００５年、「大王のひつぎ実験航海」が熊本県宇土市により実行されました。古代を想定した阿蘇石海上輸送実験（図9）、吉備地方はこの途中です。（図10.）

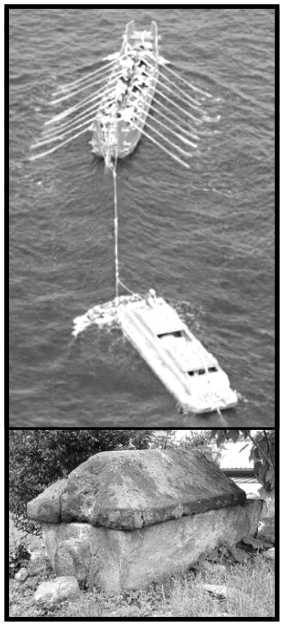


図９. 海を渡った阿蘇石棺

もう一度中期型前方後円墳、「ダブルペンタ古墳」の軌跡をたどってみましょう。（図8）

先ず関西の初期古墳で代表的なものが箸墓、シンプルなシングルペンタです。これは先述した「大和河内連環結界」構造を示しており、この時既に五芒星への知見はあったものと思われます。で、5世紀頃になってから九州よりダブルペンタ設計思想が入り込みます。

この「メサホ塚設計図」が九州から関西に渡って爆発的な展開をみた時期は、ちょうど「阿蘇石棺」が九州から関西に渡って広く活用され始めた頃と重なります。

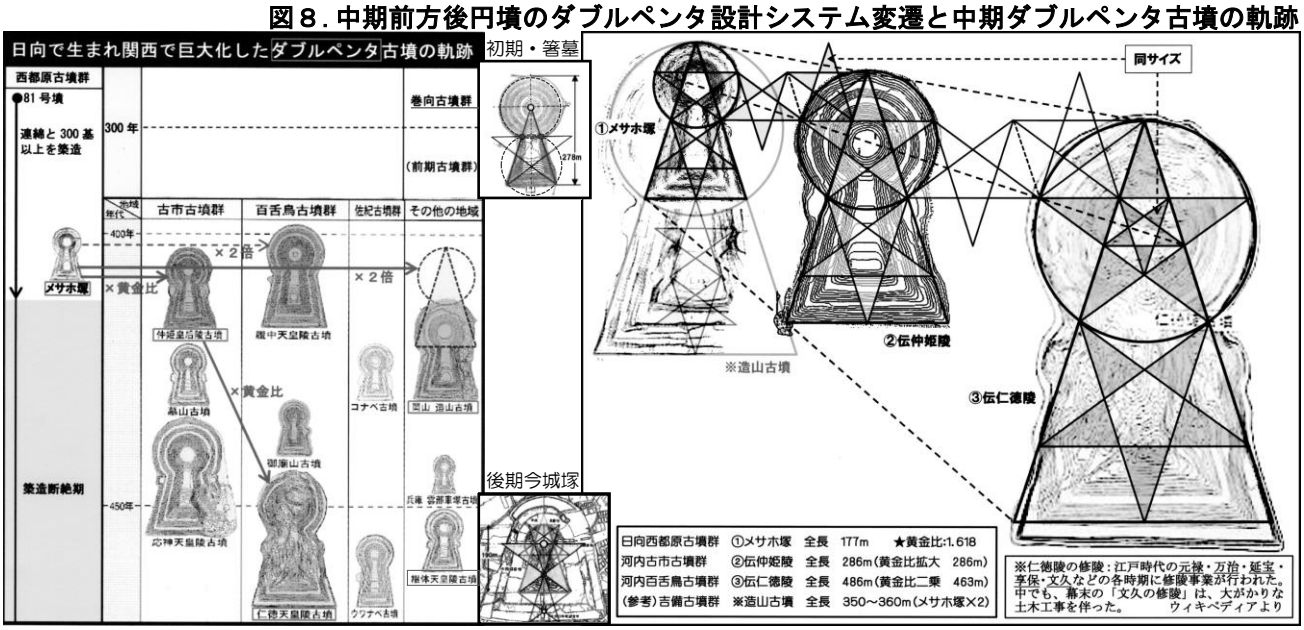
古墳設計は巨大化への要請から「黄金比倍」「2倍」更には「黄金比×黄金比倍」と進化を重ねます。で、最後には何らかの理由で後期型古墳にとって代わられ、ダブルペンタ設計は姿を消します（＊今城塚）。

「古墳はヤマト王権が各地の首長に配布（指導）したもの」というのがこれまでの考古学のシナリオでしたが、この中期古墳時代での考古学的知見からは、「九州と関西の関係」では逆のベクトルを示しそうです。

こうした「記紀」に従っての「ヤマト中心思考」では本当に「謎を深める」ばかり。せっかくの世界遺産登録を機に、歴史の真実に迫ってみたいと思います。

図１０. 阿蘇石棺移動と吉備・造山古墳

図８. 中期前方後円墳のダブルペンタ設計システム変遷と中期ダブルペンタ古墳の軌跡



## ■5世紀西日本での東遷文化と「倭の五王」

「九州から関西への古墳文化の流れ」が見られる5世紀のこの時期は、「記紀」の記述からは〔応神―武烈〕と続く「応神・仁徳朝」とされるのが一般的です。また中国史書「宋書」からは〔讃・珍・済・興・武〕と続く「倭の五王時代」に相当します。で、「応神・仁徳朝の天皇＝倭の五王」がガチガチの定説となっていますが、はたしてこの視点からこの「文化東遷」を説明することができるのでしょうか。

実はこの定説には脆弱な部分が数多くあり、それを「とにかく倭武＝雄略天皇は間違いないのだから」との理由で押し切っているようです。その根拠のひとつに〔中国風一字名称「武」は雄略の名前である「大泊瀬幼武」の「武」の字を切り取ったもの〕との見解がありますが、お隣の百済では「武寧王（斯摩）＝余隆」などの例があり、必ずしも「一字切り取り使用」が絶対ではないようです。また他に「武」字を記す人物がいたかも知れません。

それから「ワカタケル」の刀剣銘文が熊本と埼玉で出土していることより、「雄略は九州から関東までの支配者なので、倭武＝雄略」という主張も根拠にしていますが、これは固有名というより汎用名であり、実際ヤマトタケルの息子にも「ワカタケル」が登場します。

そして決定的なのは、雄略の死亡年が〔紀・四七九―四八九・記〕なのに対し、倭王武への進号記事が「梁書」の五〇二年に登場することです。（次頁参照）

とにかく「倭王武＝雄略」を絶対視せずに倭の五王の活躍を記す武の上表文を読んでみましょう。（図11）

先ず日本列島や朝鮮半島での征戦に明け暮れていた五王は「自ら甲冑を着て戦った」としていますが、応神・仁徳朝の天皇達にはそんな形跡は見当たりません。

「東征毛人・五十五国、西服衆夷・六十六国、渡平海北・九十五国」。中国の認識では倭は東夷の一国でありその東は毛人の国、武はそのような認識に立って表現したものと思われます。で、「国」とは魏志倭人伝にあるように「依山嶋為国邑」の小さな単位（＊朝鮮半島で九十五国もあることより推定できる）でしょう。さて武は、何処の視点からこの状況を俯瞰したのでしょうか。

図12をご覧ください。ヤマト王権の視点からは「東征毛人」は東日本方面で、「西服衆夷」は西日本方面となります。で「渡平海北」は朝鮮半島方面と言いたいところですが、こちらは「海西」になってしまい、ちょっと違和感があります。

では「チクシ王権」だったとすればどうでしょうか。「東征毛人」は中国・四国・関西方面で、「西服衆夷」は周囲の九州一帯。で、「渡平海北」はまさしく朝鮮半島方面となり、上表文面と一致しそうです。

それから中国・四国での「西服・東征」ベクトルにご注目下さい。「ヤマト視点」と「チクシ視点」では全く逆の進攻コースとなります。先述した「中期古墳設計図」や「阿蘇凝灰岩製石棺」、更には「馬具」や「河内への流入状況」からは「西から東へ」のベクトルを持つ「チクシ視点」に説得力がありそうです。※ちなみに「神武東征」伝説とか古代考古事象の伝播もこのベクトルに乗ることが多々あり、古代文化の流れ軸はこの「西から東へ」になっているようです。

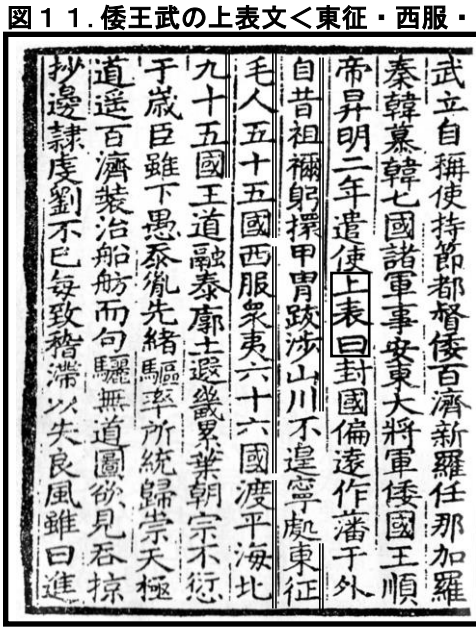
このように、「武＝雄略説の脆弱さ」や「武の上表文が示す征戦版図」とか「古墳文化の流れ」、また「近畿天皇家が倭の五王のように主体的に征戦活動を行なった形跡がない」ことなどを考えると、「倭の五王＝近畿天皇家」説には大変無理があると言わざるを得ません。

では、「倭の五王」とは一体何者だったのか、これが『日本書紀』の中に隠されていました。

図１１．倭王武の上表文＜東征・西服・北平＞

『宋書』「倭国伝」倭王武の上表文

5世紀「倭の五王」の活躍を478年に中国へ上表



武立自稱使持節都督倭百濟新羅任那加羅
秦韓慕韓七國諸軍事安東大將軍倭國王順
帝昇明二年遣使上表曰封國偏遠作藩于外
自昔祖禰躬擐甲冑跋涉山川不遑寧處東征
毛人五十五國西服衆夷六十六國渡平海北
九十五國王道融泰廓土遐畿累葉朝宗不愆
于歲臣雖下愚忝先緒驅率所統歸崇天極
道遥百濟裝治船舫而句驪無道圖欲見吞掠
抄邊隸虔劉不已每致稽滯以失良風雖曰進

図１２．ヤマトとチクシの＜東征・西服・北平＞比較

## ■「海から来た大王」の正体

**左表**は中国正史に記された「倭の五王」の全記録で、四一三年の讃から始まり五〇二年の武（＊先述）で終わる実に九〇年間に渡って中国に朝貢し続けた記録、ここでは常に半島領有権の主張と授号を求めています。

これほど半島に密着し、また列島にも強大な勢力を誇った集団が『書紀』の中にいました、**「紀氏」**です。**図12.**はその活躍した氏名をマップ化したもので、倭の五王の征服エリアと重なります。

**図13.**は「倭の五王」に「天皇家」と「紀氏」それぞれの「系図と事蹟」を対照させて、天皇家と紀氏のどちらが倭の五王にふさわしいかをチェックしたものです。結果はすべてが「倭の五王＝紀氏」、を示唆しており、おそらく天皇家は紀氏倭王に東征を任された九州の「ワケ」軍団（＊応神朝には「〇〇ワケ」が多い）だったのでしょう。それでも彼らは**「海から来た大王」**です。それで棺には故地の「阿蘇石製」を望んだのでしょう。

そしておそらく「武＝紀生磐」、彼は四八七年に任那で三韓王を目論んで「開府」し、「神聖」と称しました。

「記紀」は紀氏をあくまで天皇家の家臣として扱っていますが、これは政権正史では当然の常套手段です。『書紀』は紀小弓を「大将軍」（宋書）と直記しますが彼の主人はあくまで雄略、これが書紀の手口です。

河内地方を席捲した中期巨大前方後円墳分析が思わぬ展開をみましたが、いかがでしたか。

それにしても気になるのが5世紀に西都原台地から忽然と消えたあの「日向族」のことで、彼らは一体どこに行ったのでしょうか。

■それこそ一冊の本になりそうな課題をブッチギリでまとめましたので、大変掴みにくいものになってしまったかと思いますが、皆さまの既知識で補って頂ければ幸いです。

（東大阪文化財を学ぶ会）

| 西暦 | 中国王朝 | 中国元号 | 倭王 | 「倭の五王」の活動記録（中国正史／晋書・宋書・南斉書・梁書） |
|---|---|---|---|---|
| 413年 | 東晋 | 義熙9 | 讃 | 東晋・安帝に貢物を献ずる。（『晋書』安帝紀、『太平御覧』）[2] |
| 421年 | 宋 | 永初2 | 讃 | 宋に朝献し、武帝から除綬の詔をうける。おそらく安東将軍倭国王。（『宋書』倭国伝） |
| 425年 | 宋 | 元嘉2 | 讃 | 司馬の曹達を遣わし、宋の文帝に貢物を献ずる。（『宋書』倭国伝） |
| 430年 | 宋 | 元嘉7 | 讃？ | 1月、宋に使いを遣わし、貢物を献ずる。（『宋書』文帝紀） |
| 438年 | 宋 | 元嘉15 | 珍 | これより先（後の意味以下同）、倭王讃没し、弟珍立つ。この年、宋に朝献し、自ら「使持節都督倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大将軍倭国王」と称し、正式の任命を求める。（『宋書』倭国伝）<br>4月、宋文帝、珍を安東将軍倭国王とする。（『宋書』文帝紀）<br>珍はまた、倭隋ら13人を平西・征虜・冠軍・輔国将軍にされんことを求め、許される。（『宋書』倭国伝） |
| 443年 | 宋 | 元嘉20 | 済 | 宋・文帝に朝献して、安東将軍倭国王とされる。（『宋書』倭国伝） |
| 451年 | 宋 | 元嘉28 | 済 | 宋朝・文帝から「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事」を加号される。安東将軍はもとのまま。（『宋書』倭国伝）<br>7月、安東大将軍に進号する。（『宋書』文帝紀）<br>また、上った23人は、宋朝から軍・郡に関する称号を与えられる。（『宋書』倭国伝） |
| 460年 | 宋 | 大明4 | 済？ | 12月、孝武帝へ遣使して貢物を献ずる。 |
| 462年 | 宋 | 大明6 | 興 | 3月、宋・孝武帝、済の世子の興を安東将軍倭国王とする。（『宋書』孝武帝紀、倭国伝） |
| 477年 | 宋 | 昇明1 | 興（武） | 11月、遣使して貢物を献ずる。（『宋書』順帝紀）<br>これより先、興没し、弟の武立つ。武は自ら「使持節都督倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事安東大将軍倭国王」と称する。（『宋書』倭国伝） |
| 478年 | 宋 | 昇明2 | 武 | 上表して、自ら開府儀同三司と称し、叙正を求める。順帝、武を「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大将軍倭王」とする。（『宋書』順帝紀、倭国伝）（「武」と明記したもので初めて） |
| 479年 | 南斉 | 建元1 | 武 | 南斉の高帝、王朝樹立に伴い、倭王の武を鎮東大将軍（征東将軍）に進号。（『南斉書』倭国伝） |
| 502年 | 梁 | 天監1 | 武 | 4月、梁の武帝、王朝樹立に伴い、倭王武を征東大将軍に進号する。（『梁書』武帝紀）[3] |

図１２.倭の五王と紀氏

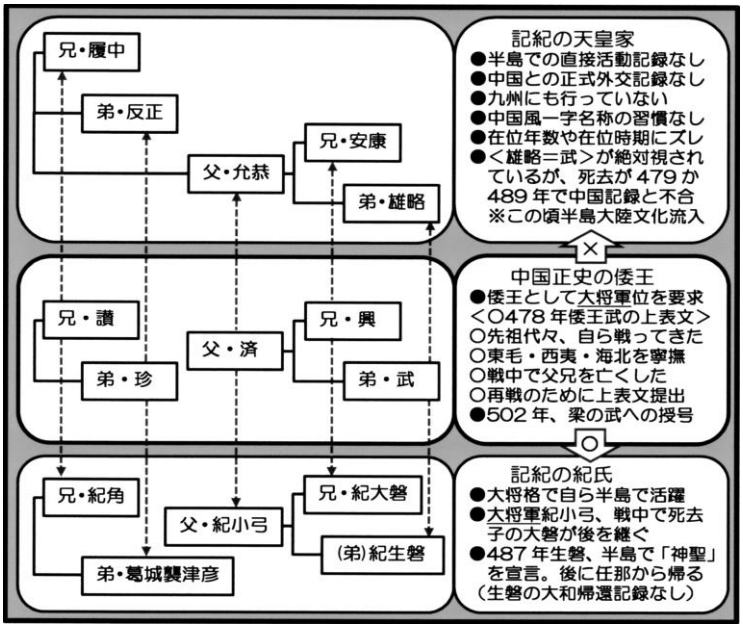



図１３.〔讃・珍・済・興・武〕天皇家と紀氏